

国語科授業活性化の試み

——「ことばについて考える」の場合——

渡辺春美

はじめに

授業の活性化を、次の二点から考えたい。すなわち、①学習者が意欲的に学習の場に参加し、具体的な学習活動を通して理解（感動）を深め、充実感、達成感を持つことができる授業をどう創るか、②授業における一連の学習によって、学習者一人ひとりが国語の力を身につけ、自立した学び手として育っていく授業をどう創るか、という二点である。いずれも大きな課題である。ここでは、「ことばについて考える」をテーマとした授業を取り上げ、その中で試みた、①教材の関連性を生かした授業の組立、②身近なことばを教材とした授業、③手引きを利用した表現指導、④指導過程・指導形態の工夫の有効性について考察したい。

一 授業の計画

1 指導目標

次のように目標を立て、①②—「価値目標」、③④⑤—「技能目標」、⑥—「態度目標」とした。

①ことばの機能—ことばの機能について理解させ、ことばと人間のかかわりについて理解を深めさせる。

②ことばの意味—ことばは、かけがえのない独自の意味を持って存在していることに気づかせる。

③ことばの意味の解明—ことば採集し、類別、比較することによって、ことばの意味を理解する力を養う。

④論理的な表現—理解したものを、筋道立て分かりやすく表現することができるようにする。

⑤論旨の理解—文章を構造的に把握することによって、論旨を理解する力を養う。

⑥ことばに対する関心を高め、ことばを注意深く用いる態度を養う。

2 指導方法 — 授業活性のために —

①教材の関連性を生かした授業の組み立て

「指導目標」の「①」を達成するために、内容の関連する、ア「愛と光への旅」、イ「鳥と名と」、ウ「ことばと文化」の三教材を用いた。アは、ことばを持たぬ「お化け」であつたヘレンが、肉親に愛情深く見守られながら、サリバン先生の献身的な努力によつて、「ことばの神秘」に気づく話である。ヘレンがことばを獲得し、人間的に変化する過程は、感動的である。生徒は、感動を通してことばの力と重みに気づき、「ことばの神秘」について考えるであろう。イは、ヘレンがことばの獲得を「精神革命」と呼んだことにも触れ、名付けることの意味を通して、ことばの機能をとらえた随筆である。ことばの機能を人間との関わりにおいて、より明確にするのが、教材ウである。教材アイウは、アを導入教材、イ・ウを発展教材として関連づけることも可能である。生徒は、指導者が多くのことばを費やさなくとも、関心にしたがつて、アイウの教材を読み進め、ことばの機能に関する理解を深めることができるものと考ええる。

②身近なことばを教材とした授業

「指導目標」の「②」「③」の達成のために、「ウク・ウカブ」など、日常的に用いる類義語一組を教材とし、学習を進める。ア、日常的に使用しながら、意味の相違、使い分けが明確でないということが関心を起こさせる、

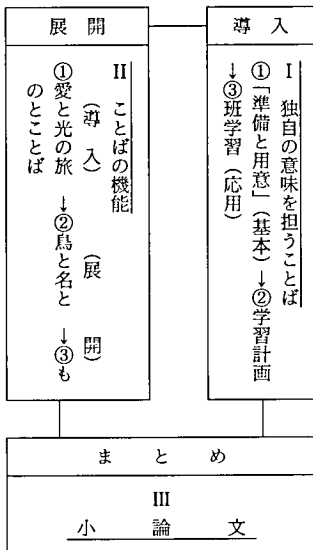
イ、用例を経験から採集し検討できるという点から、積極的な学習が見込まれる。

③手引きを利用した表現指導

「指導目標」の「④」のために、学習の手引きを利用させる。手引きは、ア、序論・本論・結論の書き出し例、及び展開のための文型を示した、イ、論の展開のために「最初に、また、次に、ついで、以上」などのつなぎの語を具体的に示した、また、ウ、「く」については「の」の意味である。「以上からくであるといえる。」「例えばくである。」「などの文型を用意し、考えを一般化、具体化できるように配慮し、生徒が筋道立てて書き進められるようにした。

④指導過程・指導形態の工夫

指導過程を次のように考えた。



ア、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの指導過程を組み、Ⅰに①↓②↓③の、Ⅱに①↓②↓③の過程を組むことで、生徒が興味を持続し、積極的に学習に取り組むように配慮した。Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの関係は、ⅠとⅡとがゆるやかな「導入↓展開」の関係となり、Ⅲが、ⅠとⅡそれぞれの「まとめ」となると考えた。

イ、「指導目標」の「③」を達成するために、Ⅰに①基本↓③応用の過程を組み、③を班学習とし、生徒が主体的に活動できるように配慮した。ウ、「指導目標」の「①」のために、Ⅱに、関連教材を生かし①↓②↓③↓の過程を組み、①を②③の導入と考えた。

3 時期・対象

時期——一九九四年二学期 対象——三年生 二組
(四三名)、三組(四四名)、九組(四三名)

4 教材

ア「愛と光への旅」(ジョゼフ・P・ラッシュ 中村妙子 訳 『新現代文』三省堂)

イ「鳥と名と」(唐木順三『精選国語Ⅰ 新改訂版』明治書院)

ウ「ことばと文化」(鈴木孝夫「ことばと文化」岩波新書)

5 展開計画

Ⅰ 独自の意味を担うことば (三時間—学習計画の説明・班分けも含む)

①基本学習(二斉学習)―「準備と用意」について考える―
②応用学習(班別学習)―意味の相違について考える―

「ウク・ウカブ」、「シマウ・カタツケル」、「トリアエズ・イチオウ」、「ナカ・ウチ」、「アケル・ヒラク」、「サケル・ヨケル」などから一組を選び、意味の相違を考える。

Ⅱ ことばの機能(七時間)

1 ことばの神秘①「愛と光への旅」②「鳥と名と」

2 ことばと文化①「ことばと文化」

Ⅲ 小論文(二時間)

二 授業の展開

1 独自の意味を担うことばの学習

(1)基本学習(二斉授業)―「準備と用意」について考える―

授業は、次のように展開した。①導入―例文として「弁当の()をする」などを用い、準備、用意どちらかを入れさせ、両者の意味の相違に関心を持たせる。②展開―ア、共通の用い方、イ、相違した用い方の例を挙げさせ、共通の場合の意味、相違する場合の意味を考えさせる。③まとめ―時間・量・確実性という観点から「準備」と「用意」の意味用法をまとめ、意味用法をとらえる方法について確認する。

(2) 学習計画の提示

「準備と用意」の相違を考える学習を終えた後、「二」の「(4)展開計画」に掲げた学習の全体計画を生徒に明らかにした。その際、次の二点の学習目標を併せて、プリントし、生徒に示した。

ア、ことばの機能について理解し、ことばと私たちの係わりについて理解を深める。

イ、ことばの意味をとらえる方法を学び、いくつかのことばを例に、ことばの意味を注意深く考える。

生徒を十班に分け、「ウク・ウカブ」、「シマウ・カタツケル」など、先に挙げたことばの中から各班一組のことばを選び、その意味の共通点と相違点について、考察させた。

(3) 応用学習(班別学習)——意味の相違について考える——
各班、選んだことば一組の使用例を挙げ、意味の共通点・相違点の考察を行った。生徒は、興味を持って取り組んだ。意味の考察を巡って活発に討議するなど、活動は積極的に熱心であった。まとめたものは十分ではないが、学習を通してことばの意味をとらえる方法(ことばの採集・類別、比較)を学び、ことばが独自の意味を持って存在していることに気づいていったものと考えられる。一例として、「サケル・ヨケル」に関するまとめを、次に掲げる。

ことばについて考える

三年二組 (A・K・H・Y)

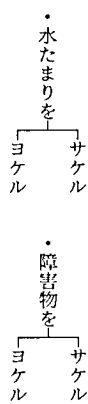
「考察語」

(サケル・ヨケル)

1 共通

◇用例

サケル



◇意味

・のぞましくないものから遠ざかる。・出会わないように、わきへ退く。

2 相違

(1) 考察語 (サケル)

◇用例

・危険をサケル・乱暴な言葉をサケル・人目をサケル・暑さをサケル・悪友をサケル

◇意味

心の中でそのものに遭遇しないように心がける。遠慮する。はばかる。

(2) 考察語 (ヨケル)

◇用例

・車をヨケル・とんできたボールをヨケル

◇意味

・実際に身をかわず。防ぐ。

2 ことばの機能の学習

ことばの機能に関し、①「愛と光への旅」と②「鳥と名」と、及び③「ことばと文化」を教材に授業を進めた。

①について、生徒は、強い関心をもって学習し、ことばについて考えた。授業後に書かせた感想に、生徒は、「私達がいつも何げなく使っている言葉がどんなに重要なものかと言うこと、そして、それをヘレンの様な障害をもつ人にとって習得することがどんなに困難かと言うことがわかり考えさせられました。」(W T 女)、「僕は、『ことば』について、今まで考えたことがなかったが、『ことば』の働き、ありがたきなど、この物語を通して理解した。」(R K 男)と記している。WATER 水に気づいたヘレンの心に「ことばの神秘」がひらめく。この「ことばの神秘」に関する理解をさらに深めるために、つづいて、②を扱ったが、生徒にとってはやや難解なものようであった。

③は、ア、「始めにことばありき」ということについて、説明しなさい、イ、「机」を定義してみなさい、ウ、「机」の定義の試みから、筆者が説明しようとしていることを、まとめなさい、エ、「三つの言語による内容の相違」の意味することを説明しなさい、という「学習課題」を与え授業を進めた。生徒は関心をもって読んだと思うが、理解は十分ではなかったと考える。

ここに①の学習によつてまとめられた、生徒のノートの一部を掲げる。

◇アニーの教育

- ・道理にかなった服従
- 理由や意味のある服従

—

マナー、日常生活のしつけ
訓練のための服従

—

- ・二つの意志の闘い
- ヘレン↓したいようにする、気質特別な意味をもつ
- て自由に行動しようとする
- アニー↓しつけ、愛情
- 服従

—

離れ家での生活

- ・アニーの他に頼るものがないという状況。
- ヘレンに服従・従順を学ばせる。
- ・家族に対して
- ・余計なつらい思い、悲しみを味あわせない配慮
- ・干渉させない

—

◇ヘレンの飛躍

- ・従順な自制心のある子供への変化
- ・ことばの神秘の理解

—

- ・自分と他の人を通じさせることのできる一つのかぎ↑伝達
- ・あらゆるものには名前がある。
- ・他のものをとらえる(確認する)働きがある↑理解

3 小論文の学習

次の手引きを配付し、小論文を書かせた。一時間を取り、後は家庭学習とした。手引きは、次のとおりである。ただし、「ことばの機能」の書き方」は省略した。

小論文の書き方

1 次の二つのうちどちらかを選んで小論文を書きなさい。

① 類義語の意味用法

② ことばの機能

2 「類義語の意味用法」の書き方

(1) 題名

例—「ジュンビ」と「ヨウイ」の意味用法

「ウク」と「ウカブ」の意味用法

(2) 構成

ア 序論—小論文を書く動機・目的・方法など

〔例〕—類義語の使用には、しばしば混乱が見られる。ことばを的確に用いるためにも、その意味用法を明確にとらえることが必要だと考える。ここでは、類義語の一例として、「ジュンビ」と「ヨウイ」を取り上げ、その用例を検討して、意味用法を明らかにしたい。

イ 本論—中心となる問題を考察し、筋道だてて述べる。

〔例〕—最初に、二語の共通の意味用法について明らかにしたい。例えば、この二語には、次のような用例が見られる。

①

②

③

①②については、……の意味で用いられている。③については……の意味である。以上から、共通の意味としては、……であるといえる。また、この用法は、……といえることができる。

次に、二語の相違について明らかにしたい。まず、「ヨウイ」の意味用法について、検討する。

①

②

③

④

①については、……の意味で用いられている。②③については……の意味である。④については……の意味である。以上から、「ヨウイ」の意味としては……であるといえる。また、この用法は、……と考えられる。

ついで、「ジュンビ」について、明らかにしたい。

(省略)

ウ 結論—全体のまとめ

〔例〕—以上、明らかにしたことをまとめれば、次のようになる。

①

②

〔参考文献〕

三 学習者の表現

1 「愛と光への旅」の学習

三クラスのうち、一クラスは広く感想を書かせ、他の二クラスについては、「ことばの神秘」に関して考えたことを書かせた。ここでは、前者の「愛と光への旅」の感想を紹介する。

生後たったの十九カ月で視力と聴力を失い、その上耳が聞こえないから言葉もろくに話せないといった三重苦を背負い込んでしまったヘレン。①闇の世界にたった一人で押し込められて②どんなにつらく悲しく思ったことだろう。大好きなキャンディーが欲しいと言えない。鳥のさえずりの声が聞こえない。昨日まで走りまわっていた野原の夏の青さ、冬の白さも見る事ができない。何もかもが自分の思い通りにならない。③自分を表現できないために、④かんしゃくを起こし暴れくるう。そんなヘレンに言葉の素晴らしさを教え彼女を暗黒の世界から、再び引き戻したのがアニーだ。⑤言葉は人と人とを結びつけるだけではなく、人と人の心も結びつける。言葉は素晴らしいものだと思つた。(K T男)

〔番号・傍線は渡辺が施した。〕

この生徒は、三重苦を背負つたヘレンの置かれた状況を①のように想像し、②のように同情を寄せる。ヘレンが④のようにふるまうのも、③のためであると的確に捉えている。サリバン先生の献身的な努力によつて、ヘレンがこと

ばを理解し、ことばによつて「暗黒の世界」から解放されるに至つたことを、この生徒は、こころに深く受け止めたものと思われる。⑤は、生徒のそのような思いに裏付けられた表現であると考えられる。生徒は、「愛と光への旅」に心を動かされながら、ことばへの関心を深め、その力と素晴らしさを理解していったと思われる。

2 小論文

次に、類義語の意味用法、ことばの機能に関する小論文を各一編紹介することにする。

「サケル」と「ヨケル」の意味用法

私たちは日本人であるが、日本人でもやはり類義語の区別には頭を悩まされていると思います。そこで例として、「サケル」と「ヨケル」について、それぞれの意味を明確にしていきたい。

最初に、この二語の共通の意味について明らかにしたい。例えばこの二語には、①水たまりをサケル・ヨケル。②車をサケル・ヨケル。などのような用例が見られる。①については、望ましくないものから遠ざかるという意味で用いられ、②については、出会わないようにわきへ退くという意味だから、共通の意味はあるものに自分に関わらないように遠のくことだと言える。

次に、二語の相違について明らかにしたい。まず、「サケル」には、①危険をサケル。②人目をサケル。③悪友をサケル。④乱暴な言葉をサケル。⑤暑さをサケル。などの用例が見られる。①～⑤より、「サケル」の意味は、心の中でそのものに遭遇しないように心がける、と言える。ついで、「ヨケル」には、①飛んできたボールをヨケル。②くもの巣をヨケル。などの用例が見られる。よつ

て②より、「ヨケル」の意味は、あるものから実際に身をかかわす、と言える。

以上、この類義語について明らかにしたことは、「サケル」も「ヨケル」も同じように使われがちなが、この二つはそれぞれ違った意味をもっており、それは、「ヨケル」は体を動かして遠ざかる行為であるが、「サケル」はそうではなく、自分の意志によって、心の中でそのものを遠ざけることである。私たちはこれからこういう類義語に数多く出会うことになるが、その時は一度立ち止まったじっくり考えてみるのもいいだろうと思う。

(YK女「原文通り」)

考察、表現は十分ではないが、両者の意味用法の根本的な相違に迫っている。意味用法を明らかにするために、それぞれの用法を挙げ、比較検討するという、授業で学んだ方法が忠実に用いられている。論の展開は、文中の傍線部に明らかかなように、手引き「小論文の書き方」に掲げた展開に沿ってなされ、一定のまとまりを見せている。

類義語の意味用法に関する小論文を書いた生徒は三七名であった。用例の分析、考察は十分ではなかったが、すべて、用例を集め、類別し、比較検討して、意味の共通点と相違点をとらえるという方法を用いて書かれている。一名を除く全員が、序論↓本論(共通点↓相違点)↓結論という展開であった。他の一名は、序論↓本論(共通点↓相違点)という展開で、結論がなかった。

ことばの機能

私達を含めて全ての人間が集団で生活をする場合に、必要不可欠なことばというものについて考えてみたい。

①まず、ことばのもつ働きについて考えてみる。私達はたくさんのことばの中で生活している。それは周りのありとあらゆるものに、名前とか呼び方があるからで、私達が五感で感じられるものには全てといえる程に呼び方がある。では、呼び方があるとはどういうことか。それは、②あるものを、その呼び方を使って表せるということ、私達があるものを認識しているからだろう。ことばは私達にその周りにある、あらゆるものを認識させるという働きがある。

③次に、④私達はことばを使うことによって、他人に対して自分の意志を表すことができる。このことは⑤集団で生活をする際に最も重要なことだろう。なぜなら、⑥自分の考えも意志も他人とも互いにわからなければ社会の流れが悪くなるし、⑦他人との関係が非常に少なくなるだろう。

⑧以上のようなことから考えてみて、人とことばは、切り離すことのできない関係である。そして、あらゆる面において、人を助けてきている。人間の社会の機能を支え、歴史を支え、文化を支えている。そして、それとも人間自体をも支えている。また認識機能については、ことばの機能と違ってまずでてくるのはこの機能ではないだろうか。それほど、当然で普通な機能であり、最も重要な機能であるといえるだろう。(SJ男「番号・傍線は渡辺が施した」)

ことばの持つ働きを、認識機能と伝達機能の二点からとらえようとしている。前者については、あらゆるものに「呼

び方」があるということを挙げ、その意味と理由について②と述べている。後者に関しては、④にその機能が説明され、その意義が、⑥と⑦という点を踏まえて、⑤と述べられている。

論の展開は、序論、本論、結論と明確で、①③⑧とつなぎのことはを用いて展開している。これは、「小論文の手引き」を参考にしたものといえよう。この生徒の場合、表現が未熟で、論の説明、展開にも不十分な点が見られる。しかし、序論、本論、結論という展開枠に沿って「ことばの機能」がまとめられており、推敲することによってより明確なものとなると考えられる。

ここでは、一例を挙げたが、他に、ことばの機能に関連させ、「ことばの使用」「ことばと文化」「ことばと物」「ことばと外国語」などの題で書いたものが見られた。

四 おわりに — 考察と今後の課題

活性化のための方法として用いた、次の四点を中心に考察したい。

①教材の関連性を生かした授業の組み立て

「愛と光への旅」は、「三 学習者の表現」で見たように、感動とともに、生徒のことばへの関心を呼び起こし、ことばの力と重みについて考えさせた。導入教材として有効に働いたと考える。「鳥と名」とは、ヘレンが獲得し

たことばの機能を明確にするものであったが、生徒にはやや難しかったようである。しかし、ことばの機能について考える方向性を生徒に与えることはできたと考える。「ものことば」は、「鳥と名と」で提起された問題を、さらに深めるよう機能したと考えるが、断定は避けたい。「指導目標」の「①」はおおむね達成されたと考えられる。しかし、どのような教材をどう関連づけ、どのような価値ある認識に至らせるのか、また、その有効性はどのように検証可能なかという問題は、教材開発とともに今後の課題である。

②身近なことばを教材とした授業

類義語に関する学習に、生徒は、積極的に生き生きと取り組んだといえる。これは、指導過程、指導形態とも関わって、生徒の積極的な取り組みが生まれたと考えられるべきであろう。「指導目標」の「②」「③」は、おおむね達成できたと考えるが、「②」については、感觸の域を出ない。

「③」は、班学習のまとめからも、「三 学習者の表現」の小論文からも達成できたと考える。

今後、生徒の身近な言語生活、言語経験を生かした授業に積極的に取り組みたいと考える。

③手引を利用した表現指導

生徒のほとんどが、小論文を書くための手引きを、下敷きとして、あるいは参考として小論文を書いていった。

特に類義語の意味用法については、有効であったと考える。「指導目標」の「④」はおおむね達成できたと考える。今後は、柔軟な展開を可能とする手引きの作成も必要である。

④指導過程・指導形態の工夫

「Ⅰ」に基本↓応用の過程を組んだことは、「指導目標」の「③」の達成のために有効であったと考える。「ⅠⅡⅢ」の指導過程は、関連し合って、ことばへの認識を深めるのに有効であったと考えたいが、断定はできない。指導過程と関連づけ、一斉・班別・個別と形態を変え、生徒の主體的学習の場を与えることは、認識を深め、技能を育成する上でも有効だと考える。

全体として、「指導目標」の「③」は、ある程度達成できたと考える。しかし、「⑤」は、ほとんど達成できなかった。今後に期したい。

〔参考〕柴田武氏他編「ことばの意味」1・2

（一九七六年九月 一九七九年六月 平凡社刊）

國廣哲彌氏他編「ことばの意味」3

（一九八二年五月 同上）

（大阪府立和泉高等学校）